



旺文社

# 漢和辭典

新版

部首索引

( )内は基本の形  
▲印は新設部首

几 八	冫 冫	冂 冂	八 八	入 入	儿 儿	人 人	亠 亠	二 二	冫 冫	乙 乙	丿 丿	丨 丨	一 一							
三四	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	二七	二六	二三	二二	二二	二五							
口 三画	マ	メ	夕	了	又	ム	厂	冂	卜	十	口	匕	勺	力	刀	山				
二六	二六	二六	二六	二六	二七	二五	二五	二五	二五	二五	二四	二四	二四	二四	二八	二五				
么	干	巾	己 巳	工	川	山	中	尸	尢 允	小	寸	宀	子	女	夕	夕 夕	士	土	口	
四五	四二	四五	四三	四一	四〇	三九	三九	三六	三五	三六	三六	三七	三六	三六	三九	三五	三三	三三	三三	三六
心 十 小 四画	冫 皇左	冫 邑石	辵 走	艹 艹	犴 犬	彳 水	扌 手	忄 心	斗	冫 中	止	彳 彳	彳 彳	弓	弋	井	廴	广		
四七	四九	四〇	二六	八〇	七九	六六	四七	四七	四七	四四	四四	四四	四四	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四七
毛	比	母 母	夂 夕	止	欠	木	月 月	日	日	无 无	方	斤	斗	文 文	支 支	支 支	手 手	户 户	戈	
六三	六三	六三	六九	六五	六一	六七	五六	五二	五七	五九	五九	五五	五三	五三	五二	五二	五〇	四七	四五	四二
辵 走	艹 艹	艹 艹	月 肉	夕 老	如 四	木 示	王 玉	允 尤	犬 犬	牛 牛	牙 牙	片	月	父 夕	父	爪	火	水 水	气	氏
二〇六	八九	八九	八六	八五	八四	七六	七八	八五	七九	七五	七四	七三	七三	七三	七二	七一	六五	六六	六五	六四
肉	示	石	矢	矛	目	皿	皮	白	廴	疒	疒	疒	疒	疒	疒	瓜	瓜	玉	玄	
七三	七六	七六	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七九	七六	七八	七七	



# 部首の名称

多くの漢字は構造上二つ以上の部分に分けて考えることができる。左右二つに分ける場合はその左の部分を偏、右の部分を旁という。上下二つに分ける場合は、上の部分を冠、下の部分を脚という。これら四つのはかに上から下へ垂れ下がっている部分を垂、下部をくるとめくっている部分を逸、全体を包みこんでいる部分を構という。以上七つの部分を逸、全体を包みこんでいる部分を取り出したものが部首である。この漢和辞典は漢字をこのように部首別に分類し、同じ部首の中は画数の順に配列してある。(一)内は基本の形。(縦置)は画数の切れ目を示す。

力(刀)	口	几	冫	一	門	八	入	儿	亻(人)	一	乙
ちから	くち	けい	しょう	いち	もん	はち	いり	に	ひと	いち	おつ
りつとう	くち	けい	しょう	いち	もん	はち	いり	に	ひと	いち	おつ
九	宀	子	女	攴	土	口	口	厶	凵	凵	凵
く	あや	こ	め	き	ち	くち	くち	か	く	く	く
く	あや	こ	め	き	ち	くち	くち	か	く	く	く
九	宀	子	女	攴	土	口	口	厶	凵	凵	凵
く	あや	こ	め	き	ち	くち	くち	か	く	く	く
才(手)	忄(心)	彳	彳	彳	弓	弋	廴	广	彡	巾	山
た	こころ	あし	あし	あし	きう	ご	いん	ひろ	あし	しん	さん
た	こころ	あし	あし	あし	きう	ご	いん	ひろ	あし	しん	さん
止	欠	木	月	日	日	无	方	斤	斗	支	支
とど	かえ	き	つき	ひ	ひ	む	ほう	しん	と	し	し
とど	かえ	き	つき	ひ	ひ	む	ほう	しん	と	し	し
矛	目	皮	夂	疒	田	月(肉)	耂(老)	耂(示)	王(玉)	牛(牛)	牙
ぼう	め	かわ	ふ	や	た	にく	らう	し	な	う	き
ぼう	め	かわ	ふ	や	た	にく	らう	し	な	う	き
舟	舛	舌	聿	耳	耂	羊	网	缶	糸	米	竹
ふね	まじ	した	つ	み	ら	ひ	あ	ほ	いと	こ	た
ふね	まじ	した	つ	み	ら	ひ	あ	ほ	いと	こ	た
門	金	里	采	酉	邑	辵	車	身	足	走	貝
かど	かね	さと	さい	ゆう	ち	く	くる	み	あ	そう	む
かど	かね	さと	さい	ゆう	ち	く	くる	み	あ	そう	む
齒	鼻	麻	麥	鳥	魚	鬼	鬲	門	彤	骨	馬
は	はな	あさ	ば	とり	う	き	か	か	か	ほ	う
は	はな	あさ	ば	とり	う	き	か	か	か	ほ	う
頁	頁	章	革	雨	隹	隶	阜				
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ				
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ				

編者

赤塚忠

阿部吉雄

編集委員

遠藤哲夫

小和田顯

加藤道理

新開高明

妹尾勇

山田勝美

## 編者のことば

私たちの言語活動にとって、漢字・漢語の知識は不可欠である。私たちの祖先は、漢字・漢語を中国から移入して、わが国語の表記を可能にし、その表現を豊富で多彩にするとともに、その文化を純化して、わが国の思想・文学・芸術・道徳・制度など広般多方面にわたる文化を培養し発展させてきた。また、漢文は、わが国の文化を形成している大きな柱の一つである。漢文を離れてわが国の文化を真に理解することも、たくましく進展させることもできないのである。古来、漢文を学ぶことは、日本人の必修の教養である。現在も、中学校の高学年ならびに高等学校で、漢文を国語の古典として学ぶことになっているのは、このような認識に基づいてのことである。

近年、学習時間の縮小などによつて、中・高校の生徒にとり、漢文の学習は容易ではなくなつてきており、また、国語の表記法の移り変わりなどで、辞書もなじみにくくなつてきている。こういう事情の配慮のもとに、親しみやすさ、わかりやすさ、引きやすさ、正確さを目標にして生まれた漢字・漢文の学習辞典が、『旺文社漢和辞典』であつた。

『旺文社漢和辞典』は、一九六四年に誕生して以来、諸方面から多大の好評を得て、版を重ねてきた。一九七四年に一度改訂を行ったが、今回、戦後三十数年にわたり施行されてきた「当用漢字表」に代わつて「常用漢字表」が世に出るに際し、その新しい基準を採用するとともに、基本から再検討を加え、全面改訂を行つて、格段の充実を期することにした。現下の漢文学習の実情に鑑みるとともに、『旺文社漢和辞典』に寄せられた各方面の所見・要望を考慮し、またその後の漢字・漢文の研究成果を採用するとともに、従来の編集・改訂の諸経験の活用を務めたことはいふまでもない。

その結果、旧版に比較して、本辞典の改まった点は次の通りである。(一)増ページと版面のワイド化により、親字約三百と熟語約三千を増補した。(二)部首説明を加え、親字に異体欄などを設けて、漢字の学習を体系的に、しかも親しみやすくした。(三)熟語の配列を改め、いっそう引きやすくし、その音読・訓読の別を明瞭にした。(四)高校漢文教科書に類出する主要な漢詩を本文中に収録した。(五)用例の読みを大幅に増し格段にわかりやすくした。(六)巻末の索引をいっそう充実させた。以上のように、漢字・漢文の学習辞典として活用できるよう、すみずみまで十二分に編集上のくふうを徹底したつもりである。

本辞典の特長を総合して掲げれば、次の通りである。

一、高校生や、一般の大学生の漢字漢文学習に必要な親字約七千三百字、熟語約四万八千語を厳選収録した。

高校漢文教科書はもちろん、広く漢籍・日本古典その他の資料から親字・熟語を採録し、熟語では一般語句のほか、故事成語・有名詩句・地名・人名・作品名などを幅広く積極的に収録して、高校生・大学生の漢字漢文学習全般の用途に応ずるものとした。

一、漢字への親しみと字義の正しい理解に役だてるように親字全部に解字欄を設け、また、異体欄で字体の区別を明確にした。

必要なものには漢字の古い形である甲骨文や金文・篆文を示し、また漢字の構成要素である意符および音符を平易に分析説明して、漢字の原義・転義を明らかにした。また、親字に関する本字・別体・古字・俗字を異体欄を設けて示した。

一、語法欄・同訓異義欄・参考欄・注意欄を設け、親字に関して種々の角度から解説を加えた。

漢文法上、注意を要する親字(助字類)については、語法欄で用法・意味などをくわしく解説した。また同訓異義欄を設けたほか、参考欄では同音符の字、注意欄では別字・誤字を扱うなど、漢字学習に必要な知識が広く得られるよう細かいふうを施した。

一、有名漢詩の本文収録、用例の豊富な引用、さし絵・図版の多数挿入など効果的学習の配慮につとめた。

高校漢文教科書に類出する主要な漢詩八十三首を読みと口語訳を施して本文中に収録した。また、有名漢籍などから語例・文例を多く引用して出典を明示し、用例にはできるだけ読みを付した。そのほか、多くのさし絵・図版、付録に「漢文参考図」を掲載した。

一、漢字・漢文の基礎的知識と背景知識を養う実用記事を数多く付録に収め、また各種索引を充実させて利用しやすくした。

付録には「漢字の知識」「熟語の知識」「漢文の読み方」「漢詩の知識」「中国の主要思想」「中国文学史年表」その他全十三項目にわたる記事を掲載した。また、助字・漢詩・故事成語・人名・書名の索引を設け利用の便を十分にはかった。

以上、本辞典が漢字・漢文の学習に貢献するとともに、旧版に増して各方面から愛用されることを切望してやまない。

本辞典の出版にあたっては、左記編集委員の方々にとくに多大のご尽力を賜った。わけでも、小和田願氏には編集上諸業務の統制に終始献身的な協力をいただいたことを銘記しておきたい。また、編集委員ともども執筆・校正あるいは資料提供など、ご協力をいただいた学友諸氏の名も左に記し、深甚の謝意を表する。

〈編集委員〉 遠藤哲夫 小和田 願 加藤道理 新開高明 妹尾 勇 山田勝美

〈執筆・校正〉 泉 隆式 井上 正 上末永生 大竹修一 千葉三胤 津村正登 中川曠人 林茂夫(敬称略 五十音順)

最後に、この辞典の初版以来、編者として基礎を築かれ、たえず御指導を賜った阿部吉雄先生が、先年御逝去なさった。記して深く哀悼の意を表する次第である。

# 凡例

## 一、この辞典の構成と内容

### 親字

〔収録字数〕 約七、三〇〇字

- (7) 常用漢字（教育漢字を含む）
- (イ) 人名用漢字
- (ウ) そのほか、高校・大学生、一般社会人に必要と思われる漢字

注1(7)「常用漢字」は、昭和五十四年三月に中間審判として報告された「常用漢字表案」による。(イ)「人名用漢字」は昭和二十六年、および昭和五十一年に内閣告示された「人名用漢字別表」人名用漢字追加表による。

### 熟語

〔収録語数〕 約四八、〇〇〇語

- (7) 国文・漢文で用いられる、漢字を用いた主要な熟語、難読語など。
- (イ) 主要な故事熟語・成句・有名詩句など。
- (ウ) 漢文学習上必要な人名・地名・書名・官職名・動植物名など。
- (ニ) 漢詩：高校漢文教科書に頻出する主要な漢詩八十三首を、詩題を見出し語として掲げ、読み・口語訳を施し本文中に収録。

### 索引

▼親字を検索するために次の三種類の索引を設けた。

- (1) 音訓索引 親字の音または訓がわかっているときに用いる。漢字の音訓を五十音順に配列したもの。(二二五ページ)
- (2) 総画索引 親字の音訓などがわからないときに用いる。親字の総画数順に配列したもの。(二六ページ)

凡例

(3) 部首索引 親字の部首がわかっているときに用いる。(表見返し)

▼漢字・漢文学習の便をはかって次の四種類の索引を設けた。

- (1) 助字索引 主要助字を画数・用法別に分けて示した。(二二五ページ)
- (2) 漢詩索引 本文に収めてある漢詩を、詩題・起句・詩人名の三種に分けて、五十音順に配列した索引。(二二五ページ)
- (3) 故事成語・成句索引 本文に収めてある故事成語・成句のうち、主要なものを五十音順に配列した索引。(二二五ページ)
- (4) 人名・書名索引 本文に収めてある主要な人名・書名を五十音順に配列した索引。(二二五ページ)

### 付録

巻末に漢字・漢文の学習に必要な重要項目を収めた。

- (一) 漢字の知識
- (二) 熟語の知識
- (三) 漢字の筆順
- (四) 漢文の読み方
- (五) 漢詩の知識
- (六) 中国の主要思想
- (七) 中国文学史年表
- (八) 中国簡化字表
- (九) 中国度量衡表
- (十) 漢文参考図
- (十一) 中国歴史地図
- (十二) 五行・十二支・二十八宿
- (十三) 重要学統図

## 二、この辞典のきまり

### 親字について

#### 1 配列

- (1) 原則として、「康熙字典」の例に従って、部首を設け漢字を分類し、部首の画数順に配列した。ただし新字体となつて、従来の部首では引きにくくなつた漢字については、所属部首の変更および、了・夕・ト・レ



法のせまい音には傍線をつけて示した。

(例) 「常用漢字表」にない音、また、常用漢字以外の漢字の音は細字で示した。

(4) 字音の配列は、「常用漢字表」の音や、広く通用する音を前に置き、字音の区別が「意味」と関連する場合には、 $\square\square\square$ によって区別し、「意味」の $\square\square\square$ と対応するようにした。

(4) 字音には次の記号をつけて区別した。

●：慣用音 ●：漢音 ●：呉音 ●：唐(宋)音

なお、漢音・呉音が共通するのはこの区別を省いた。

(00) 字調の区別 (7) 各字音が所属する韻目と四声とを略号(付録「漢字調」)で示した。

(イ) 韻の区別が「意味」と関連する場合には、 $\square\square\square$ によって区別し、「意味」の $\square\square\square$ と対応するようにした。

#### (02) 字調

(7) 字調は、横線の下に平がんで現代かなづかいによって示した。

(イ) 「常用漢字表」に示された調は太字で示し、送りがなの部分を細字で示した。また、用法のせまい調には傍線をつけて示した。

(例) 「常用漢字表」にない調、また、常用漢字以外の漢字の調は細字で示した。

(4) 字調が活用語の場合は、活用語尾をハイフン(一)で区別した。

#### 4 異体

(1) 親字と字形は異なるが字音も意味も同じで通用しあう文字のうち、親字から派生したり、成り立ちが類似だったりするものを異体字とし、その主要なものを掲げて親字との関係を示した。

(2) 異体字の区別 本辞典では異体字の名称を次の基準で区別した。

(7) 本字：従来正字と考えられてきたもので、字の成り立ちから考え、て本来の正しい字形と考えられるもの。

(イ) 古字：おもに、周金文や、「説文解字」の古文・籀文・篆文などを楷書に改めたもの。

(例) 別体：「説文解字」の「或体」(同音・同義で形異なる文字)、および、構成要素は異なるが仕組みは正しい異体字。

(4) 俗字：文字の成り立ちがわからないために、本字がくずれたり、類似の字形を混同して画一化したりしたもの、および、草書体による米したり、簡便な筆写のために省略したりした略字など。

#### 5 解字

(詳しくは付録「漢字の知識」二ページ参照)

漢字を正しく理解し、また親しみやすくするために、すべての漢字に解字欄を設けて、親字の成り立ち・構造などに関する解説を施した。

(1) 親字がその成り立ちの字形と似るしく異なつたもの、その他必要と認めるものには、甲骨文・金文・篆文などの古い字形を掲げた。

(2) 親字構成の基本原理を示すために、六書の象形・指事・会意・形声・仮借・転注に、象形指事と会意形声を加えた分類名を用いた。

(3) 次に、親字の構造を分析して原義を明らかにし、「ひいて(その意味が延長されて)・または(転じて(転用されて))」基本義や重要な意味を表したり、「借りて(借用されて)」他の意味に用いられたりする次第を説明し、意味展開の骨子を示した。

(4) 形声字の場合には、音符が表す語源的に共通な意味は、「(つよい意↓強\*)」のように、(一)内に基本義を示し、語源的に同系統で意味の近い他の文字を「↓」で示して例証とした。

#### 6 意味

(1) 漢字・漢語の理解と使用に必要な意味を精選して掲げた。

(2) 字音・字調による区別がある場合は、 $\square\square\square$ を用いて区分し、意味・用法の相違の大小によって、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺に分類して示した。

(3) 広く用いられる字調は、漢字部分を太字で、送りがなの部分は細字で示し、活用語尾はハイフン(一)で分けて区別した。歴史的かなづ

かひのあるものは、その下に（ ）で包んで示した。

(4) 固有名詞や専門用語など語の種類により、語義の頭に『地』『動』

【法】…などの記号をつけた。(ヘーシキ照)

(5) 国語だけに用いられる特殊な意味・用法には、國の記号をつけて語義の末尾に掲げた。

(6) 語義にはつとめてその親字に対する同意語、反対語・対応語を掲げ、次の記号で区別した。

⇐: 同意語      ⇨: 反対語・対応語

ただし、①②…のいくつかに分かれた意味のすべてに対応するものは、その最後に一度だけ次の形式で掲げた。

【一】…      【二】…

(7) 意味欄の最後に、**〔**因**〕**の項目を設けて、人名に用いる読みを示した。

7 注意

字形が似ていて混同しやういと思われれる文字や、誤字を掲げた。

8 語法

漢文法上、注意を要する親字（主として助字類）については、その用法・意味などについて文法的に詳細な解説を施した。

9 同訓異義

同じ訓読みであつて意味の異なる漢字の主要なものについて、それぞれの相違を明らかにした。解説箇所は、その読み方をする場合に最も一般的に用いられる親字のところに置き、他の文字では解説箇所を参照させた。

10 参考

(1) 親字の特殊な用法、形の似通つた漢字の記憶法。

(2) 平かな・片かなの起源。

(3) 同音の漢字による書きかえ字（昭和三十一年七月国語審議会報告）。

(4) 「常用漢字表」付表に示されている熟字訓。

(5) その親字を音符（文字の音を表す部分）とする形声字。

熟語について

1 配列

(1) 原則として字数の多少、音訓にかかわらず二字目の現代かなづかいによる読みの五十音順によつた。読みが同じ場合は、二字目の画数順とした。

(2) ある熟語に他の語句がついてできた派生語、および意味上からは派生語といえないものも、基本熟語と字体が同じものは、便宜上『』に入れてその熟語の次に全体の読みの五十音順で掲げた。

例

【一挙一動】イツキツキドウ

【太宰府】タイサイフ

【一挙一投足】イツキツキトウソク

【太宰府】タイサイフ

(3) 熟字訓・旧国名など、一、二字目の読みが区別できないもの、また区別しにくいものは熟語の最後に全体の読みの五十音順に掲げた。

例 【相輪】ソウリン

【吹笛】フエフキ

【相模】ソウモ

【吹毛】フエフキ

【相撲】ソウブク

【吹雪】フエフキ

(4) 訓読する句、返読する語で派生語とならない熟語などは熟語の最後に「」に入れて、全体の読みの五十音順で掲げた。

例 【仁里】ニンリ

【仁人之安宅也】ニンニノヤスヤシ

【賊仁者謂之賊】ソクニシヤウイフニソク

2 見出し

(1) 同一の親字で構成され、異体・通用などの関係にある別な文字を用いて同一の語を表す場合は、これを一語として扱ひ「」内に一括し

て掲げた。掲載順は、常用の形を先に掲げた。

例 【人煙・人・烟】ヒトノシマ 【愛・玩・愛・版】メダカ

(2) 同一の親字で構成される同義の熟語は、基本となる熟語のもとに準見出し語として掲げた。

例 【寸刻】ツツ わずかな時間。【寸時】ツツ

(3) 漢詩：高校漢文教科書に類出する主要な漢詩は、詩題を見出し語として掲げた。(二二六ページ「漢詩索引」参照)

### 3 字体・旧字体表記

(1) 常用漢字の字体は「常用漢字表」により、新字体といちじるしく字形が異なる漢字には、その旧字体を( )に入れて示した。ただし親字と同じ一文字目の漢字(返って読む場合は二文字目以下)には改めて旧字体を示さなかった。また、三字以上の熟語で旧字体を示す漢字が二文字以上続く場合は、語構成単位で一つの( )に包んで示した。

例 【主体(體)】テ 【与党(黨)】トウ 【易与】ヤク

【一触(觸)即発(發)】ソク

(2) 人名用漢字のうち新字体で示されたものは新字体で掲げ、旧字体を( )に入れて示した。

例 【世(祿)意(意)】セキ・イ 【妖(艶)艶(艶)】ウツクシ

4 漢字記号 熟語見出しの漢字の上に次の記号をつけて種別を示した。

(A) ……常用漢字表にない漢字  
(B) ……同音の漢字による書きかえの場合のもの  
(C) ……同音の漢字による書きかえ(昭和三十一年七月国語審議会報告)によった。

※書きかえについては「同音の漢字による書きかえ(昭和三十一年七月国語審議会報告)」によった。

例 【天(蓋)】テン 【拳(術)】ケン 【下(克)剋(上)】ゲキ

### 5 よみがな

(1) 熟語の下に、その読みを現代かなづかいで、音読みのは片かな、訓読みのは平がなで区別して示した。

凡 例

(2) 歴史的かなづかいのあるものは、現代かなづかいの下に( )で包んで、音読みのは片かな、訓読みのは平がなで区別して示した。

例 【一(堂)】イツドウ 【水(魚)之(交)】スイイサノウマ

(3) 国訓、および国語読みは、読みがなの上に國の記号をつけた。

### 6 語釈

(1) 同一の熟語で読み相違によって意味が異なる場合は、○◎…の記号で区分し、同じ読みの中で意味が二つ以上ある場合は、①②…の記号、さらに細分するときは、(ウ)(イ)…の記号で区分した。

(2) 語の種類により語釈の頭に【人】【書】【地】【動】【植】【哲】…などの記号をつけて語の種類を明示した。(二ページ参照)

### 7 用例・出典

語釈を明確にするために、高校漢文教科書・有名漢籍などからつめて用例を引用し、その出典を明示した。

(ウ) 引用文は「」で囲み、その出典は( )で包んで示した。

(イ) 見出し語に相当する部分は原則として「——」で、返って読む場合は「——」の形式で示した。

(ウ) 用例には、できるだけ読みを施し、特にむずかしいと思われる部分には( )の形で簡訳を施した。

### 8 同意語・反対語・対応語

熟語の意味のそれぞれに対する同意語、反対語・対応語がある場合は次の記号をつけて語釈の最後に掲げた。

……同意語      ↑……反対語・対応語

また、①②…のいくつかに分かれた意味のすべてに対応するものは、その最後に一度だけ次の形で示した。

( ) ( ) ( )

### 9 注意・参考

語釈の末尾に適宜( )を設けて、見出し熟語の使用上の注意事項

10

項および、参考事項を説明した。

逆熟語

熟語の末尾に、親字が下についてできている熟語を▽印をつけて掲げた。その配列は、全体の読みの五十音順、同じ読みの場合は一字目の画数順とした。

例 【及】 ◇企及・言及・波及・普及

出典

- (1) 出典名は通用する名称を用い次のように略称した。
  - △晏子▽ 晏子春秋
  - △顔氏▽ 顔氏家訓
  - △公羊▽ 春秋公羊伝
  - △家語▽ 孔子家語
- △穀梁▽ 春秋穀梁伝
- △左伝▽ 春秋左氏伝
- △世説▽ 世説新語
- △通鑑▽ 資治通鑑

この辞典に使った略号・記号

親字関係の記号

- ◎：常用漢字
- ⊙：人名用漢字
- ⊕：常用漢字表にあって、
- ※：常用漢字表にない漢字
- \*：当用漢字表にあって、
- 〔 〕：常用漢字表にない漢字

〔 〕：字音・韻の相違によって、訓義にちがいがあ  
る場合それぞれの頭につ  
けて対応させる

字音

- ⊙：慣用音
  - ：漢音
  - ⊕：吳音
  - ⊙：唐(本)音
- (一)：意味欄で、訓義が活用語の場合、活用語尾の前に「一」を入れ、その文語形を(一)に入れて示す

熟語関係の記号

- ⊙：常用漢字以外の漢字
- ( )：同音の漢字による書きかえの場合、もとの字を包む
- 〔 〕：派生語・関連語
- 〔 〕：訓読する句や、返って読む

△白虎通▽白虎通義

このほか、四字以上の書名で略記しても誤解のおそれのないものは上記の要領で略記した。

- (2) 「淮南子」▽「戦国策」など、三字よりなる書名は略さなかつた。
- (3) 書名には、編名・章名などの細目もできるだけ掲げた。

- △淮南子・原道▽
- △孟子・梁惠王▽
- △史記・項羽紀▽
- △論語・学而▽

- (4) 出典が詩文などの場合は、「作者名・題名」を示し、詩の場合は末尾に「一詩」と示した。ただし、題名に、詩・歌・吟・行・曲・賦・辞・句・詠などある場合は、「一詩」を省いた。
- (5) 詩文の題名が長い場合は、これを省略して△韓愈・文▽△白居易・詩▽のように示した。

熟語

- 〔 〕：見出し熟語と同義で、一字目の同じ熟語
- ⊕：読み相違によって意味も異なる場合、それぞれの読み頭の頭につける
- ◇：逆熟語の始まる頭につける

親字・熟語に共通の記号

- ⊕：国語の訓義
- ⊕：同じ意味の漢字または熟語
- ⊕：反対・対応する意味の漢字または熟語

百科語の記号

- 〔人〕人名
- 〔地〕地名
- 〔書〕書名
- 〔動〕動物名・動物学
- 〔植〕植物名・植物学
- 〔語〕語学
- 〔医〕医学
- 〔法〕法律
- 〔哲〕哲学
- 〔数〕数学
- 〔理〕物理学
- 〔化〕化学
- 〔詩〕漢詩

# 字音かなづかい表

▽この表は、その字音に属する漢字の一部を例示したものである。  
 ▽上方の太字は現代かなづかい、下方の「」は歴史のかなづかいを示す。  
 ▽歴史的かなづかいが現代かなづかいと一致するものは省略した。

イ(キ) 位副委威為

畏胃草唯尉惟偉

イキ(キキ) 威

イ(キン) 尹員院韻

エ(エ) 会回廻懸

エ(エイ) 衛

エ(エン) 円宛垣懸

オ(アウ) 汚於烏愚

オ(アウ) 岡央桜奥

ウ(アウ) 押厭鴨

ウ(アウ) 王汪旺皇

ウ(アウ) 翁

オ(ク) 屋

オ(チ) 越

オ(ン) 怨苑袁温

カ(ク) 化戈火瓜禾

カ(ク) 瓦西臥

快怪悔塊壞懷

外

カク(クク) 画弘郭

カク(クク) 廓觸獲穫

カク(クク) 刮括活

カツ(クツ) 滑猪猪闊

カツ(クツ) 月

カツ(クツ) 冠巻思貫喚換棺款

カツ(クツ) 衍完官

カツ(クツ) 眷勳寬慣管閏款緩

カツ(クツ) 靈館瓊觀

カツ(クツ) 丸元玩

カツ(クツ) 頑瓶頑

カツ(クツ) 九久仇

カツ(クツ) キ(キ) 丘旧休朽臼求灸究

カツ(クツ) キ(キ) 糾救球舅鳩

カツ(クツ) キ(キ) 急級友給轟

カツ(クツ) キ(キ) 牛

カツ(クツ) キ(キ) 兄匡

ユウ(カウ) 尤巧交向

ユウ(カウ) 奸江考行坑孝抗更

ユウ(カウ) 享効幸庚有巷拷郊

ユウ(カウ) 香校浩耕耗航降高

ユウ(カウ) 康港梗較絞較綱

ユウ(カウ) 醉稱衝漢漢

ユウ(カウ) 甲岬闊

ユウ(カウ) 皇荒絛黃慌

ユウ(カウ) 劫

ユウ(カウ) 号榜兩強

ユウ(カウ) 毫鄒傲豪濠

ユウ(カウ) 合業

ユウ(カウ) 劫

ユウ(カウ) 尼地治持

ユウ(カウ) 直

ユウ(カウ) 竺軸

ユウ(カウ) シ(シ) 取因州

ユウ(カウ) シ(シ) 舟秀周洲祝秋臭酋

シヨウ(シヤウ) 柔獄蹂

シヨウ(シヤウ) 十拾跌

シヨウ(シヤウ) 住重

シヨウ(シヤウ) 女餘

シヨウ(シヤウ) 井正

シヨウ(シヤウ) 生匠床姓尚昌青政

シヨウ(シヤウ) 星相省瘖症祥商唱

シヨウ(シヤウ) 章掌品趾裝裝傷傷

シヨウ(シヤウ) 聖詳彰精障償

シヨウ(シヤウ) 七(セ) 少少抄抄肖

シヨウ(シヤウ) 招沼昭宵消天稍紹

シヨウ(シヤウ) 椒饒焦鳩稍紹照照

シヨウ(シヤウ) 焦蕉蕭蕭

シヨウ(シヤウ) 七(セ) 妾扶洪捷涉

シヨウ(シヤウ) 憎摺囉

シヨウ(シヤウ) シヨウ(シヤウ) 上成

シヨウ(シヤウ) 狀城淨常情盛靜聲

シヨウ(シヤウ) 糞穢讓讓

チヨウ(チヤウ) 丁疔

チヨウ(チヤウ) 打町長釘橫張悞頂

チヨウ(チヤウ) 脹腸暢漲聰

チヨウ(チヤウ) (チウ) 弔兆挑影眺

チヨウ(チヤウ) 鈞鳥朝超詭跳眺肇

チヨウ(チヤウ) 網趨眺調調

チヨウ(チヤウ) (チウ) 帖疊練

チヨウ(チヤウ) ツイ(ツキ) 对追堆推

チヨウ(チヤウ) 隊墜睡

チヨウ(チヤウ) トウ(タウ) 刀当到逃

チヨウ(チヤウ) 倒唐套島党討掉

チヨウ(チヤウ) 掉海盜陶棹棠湯

チヨウ(チヤウ) 跳稻橙橙

チヨウ(チヤウ) (タフ) 杏塔答答搭

チヨウ(チヤウ) 踏踏

チヨウ(チヤウ) ドウ(ダウ) 堂道導

チヨウ(チヤウ) (ダフ) 納

チヨウ(チヤウ) ニョウ(ネウ) 尿溺枕

ニョウ(ネウ) 入

ニョウ(ネウ) 遺繞繞饒

ニョウ(ネウ) ノウ(ノウ) 腦

ニョウ(ネウ) (ナフ) 納

ニョウ(ネウ) ビョウ(ビヤウ) 平兵

ニョウ(ネウ) ビョウ(ビヤウ) 平兵

ニョウ(ネウ) (ハウ) 表俵豹票剽

ニョウ(ネウ) 漂標飄標

ニョウ(ネウ) ビョウ(ビヤウ) 平病

ニョウ(ネウ) (ハウ) 苗渺秒描猫

ニョウ(ネウ) 渺廟貓

ニョウ(ネウ) (ハウ) 方包呆芳

ニョウ(ネウ) 邦防宝房抱放泡保

ニョウ(ネウ) 胞傲砲紡交訪報棚

ニョウ(ネウ) (ハフ) 法獲直

ニョウ(ネウ) (ホフ) 法負直

ニョウ(ネウ) (ハフ) 亡即妄忙

ニョウ(ネウ) 坊坊忘防防妨防

胞嬰繭

(ハフ) 法獲直

(ホフ) 法負直

亡即妄忙

坊坊忘防防妨防

茄忙旁妨妨茫望傍

帽影影影影

(ホフ) 乏

ミョウ(ミヤウ) 名命

明冥

(ヌウ) 妙苗

モウ(バウ) 亡毛妄孟

冒冒望猛

ユイ(ユキ) 唯遺

ユウ(イウ) 又友尤右

由有佑酉油幽祐悠

郵踴遊誘優

ヨウ(エウ) 夭幼妖杏

要搖腰窯誦

(エフ) 養

(ヤウ) 羊羊揚陽

楊楊養

リ(ユウ) 柳流琉

留留流溜榴榴

リ(ユウ) 立笠粒

リ(ユウ) 冷良恰亮玲梁量

領諍靈

リ(ユウ) 了料寥聊僚

寮寮寮寮

リ(ユウ) 鯉魚

ルイ(ルキ) 淚累累類

ロウ(ラウ) 老勞牢郎

朗浪狼郎

ラ(ラ) 拉臘蠟

(九)

字音かなづかい表



